

研究拠点形成事業
平成 29 年度 実施計画書

B. アジア・アフリカ学術基盤形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	聖路加国際大学
タンザニア拠点機関：	ムヒンビリ健康科学大学
インドネシア拠点機関：	国立イスラム大学

2. 研究交流課題名

(和文)：アジア・アフリカ圏の妊産婦・新生児死亡率減少のための助産人材育成モデルの開発
(交流分野： 母性看護・助産学)

(英文)：Development of midwifery personnel training model for maternal and newborn mortality reduction in Asia and Africa

(交流分野： Maternal Infant Nursing & Midwifery)

研究交流課題に係るホームページ：

<http://university.luke.ac.jp/about/project/aamrc/about.html>

3. 採用期間

平成 27 年 4 月 1 日 ～ 平成 30 年 3 月 31 日
(3 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：聖路加国際大学

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：学長・福井次矢

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：大学院看護学研究科・教授・堀内成子

協力機関：毛利助産院

事務組織：聖路加国際大学事務局

相手国側実施組織

(1) 国名：タンザニア

拠点機関：(英文) Muhimbili University of Health and Allied Sciences (MUHAS)

(和文) ムヒンビリ健康科学大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：

(英文) School of Nursing・Senior Lecturer・Sebalda LESHABARI

協力機関：(英文) Tanzania Midwives Association、Muhimbili National Hospital
(和文) タンザニア助産協会、ムヒンビリ国立病院

(2) 国名：インドネシア

拠点機関：(英文) Universitas Islam Negeri (UIN) Syarif Hidayatullah
(和文) 国立イスラム大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：

(英文) School of Nursing・Lecturer・Yenita AGUS

協力機関：(英文) World Health Organization Country Office in Indonesia
(和文) 世界保健機関インドネシア事務所

5. 全期間を通じた研究交流目標

1. アジア・アフリカの現場で希求されている助産人材の育成モデルの開発

本研究交流事業の前身では、3年間(平成23-25年度)のアジア・アフリカ学術基盤形成事業を通じ、タンザニア国内初の助産学修士課程の設立に成功した。設立前の教育セミナーを通じ、現地の助産師が、自らの知識・技術向上に対し高い意欲を持っているにもかかわらず、学びの場が限られていることが判明した(Shimpuku et al., 2012; Shimpuku et al., 2013)。高い妊産婦死亡率、新生児死亡率減少の鍵を握る助産師・看護師の育成のための教育をタンザニアでの研究を基盤として、インドネシアに発展・展開し、自国で持続的にその育成が可能なモデルを開発することが、本研究交流の目標である。

2. 国際保健人材の強化のエビデンスを示す助産研究拠点の形成

外務省は、2013年5月に国際保健を日本外交の重要課題と位置づけ、国際保健分野において日本人の果たす役割の拡大を戦略目標に掲げ、人材育成をその具体的施策の一つとしている。大学院において助産の教育研究を行う我が国の特徴は、臨床・教育・研究が連携・循環している点にある。本研究交流は、3年間で基盤を形成した戦略をタンザニアからインドネシアに発展させるものであり、資格を得た後に生涯に渡って専門職教育という長期的視点を持った助産教育研究を日本型モデルとして世界に発信する拠点を形成する。

3. 母子保健関連目標の達成に貢献する助産職のキャリア開発と評価

2015年に期限を迎えたミレニアム開発目標(MDGs)のうち、母子保健関連目標は達成の遅れが指摘されている。特に妊産婦死亡、新生児死亡を減少させるには、周産期医療へのアクセスと質の改善が急務である。タンザニアでは約半数が未だ出産時に専門の技能を持つ分娩助産者(Skilled Birth Attendant : SBA)にアクセスできておらず、インドネシアでは、出産時のSBAへのアクセスにおける地域間や集団格差が問題である。その要因として医療の質の問題が指摘されている。医療者は膨大な数の患者対応に追われており、妊産婦は医療機関で満足にケアが提供されず、信頼関係が築けないことから、次のアクセスを控えることが両国で報告されている(Agus, 2012; McMahon, 2014)。病院には出産中に重

篤な状況に陥ってから搬送される場合が多く、多くの母児が遷延分娩、産後出血、新生児蘇生の遅延など、日本であれば救命の可能性のある状況で死に至っている。その要因として医療者不足、教育者不足ばかりが指摘されているが、助産職のキャリア開発に関する研究はほとんど行われておらず、国や地域毎に役割が異なる助産師の実践能力をグローバルに強化するしくみづくりが不可欠である。本研究交流では、母子保健分野の主な担い手である助産職への教育評価を、最終的に医療の受け手である女性と子どもの成果指標である妊産婦死亡、新生児死亡の減少として研究で示すことを目指すものである。

6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

<研究協力体制の構築>

計画通りタンザニアで実施された R-1 の共同発表を、国際学会でタンザニア側研究者と共同発表し、R-2 はタンザニア側コーディネーターが現地でのデータ収集責任者となり、事前の話し合い後研究倫理審査の提出、日本側若手研究者の実施したデータ収集のスーパーバイズを行い、データ収集と分析を終了した。3 カ国間の協同と世界保健機関(WHO)の共催で実施した S-1 は、タンザニアから研究者 2 名、インドネシアから研究者 2 名が来日し、WHO から 2 名の講師を迎えて新生児ケアを実践的に教えるファシリテーターの育成が実施され、3 カ国が顔を合わせて、WHO の最新のエビデンスに基づいた新生児ケアをともに学びあう機会となった。現在両国の現地で行うセミナーとその評価研究に向け、タンザニア、インドネシア側研究者共に開催場所と参加者の調整を分担し、評価研究の準備を進めている。

インドネシアとの交流においても、R-3 の実施によるニーズ調査と、そのニーズに基づいた分娩後の早期母子接触(early skin-to-skin care)セミナーを実施した。ニーズ調査での臨床の看護職のニーズを質的に分析中であり、またセミナー前後の対象者の知識や態度の変化についての報告を論文執筆中である。インドネシア側コーディネーターはその後研究生として来日し、論文の執筆と次年度の計画について 2 日に 1 回の頻度で会い、研究計画を進めている。インドネシア側とも共同体制の強化が図られた。

<学術的観点>

タンザニアと実施した R-1 の成果は、ケニアで開催されたアフリカ看護研究者が集う East Central and Southern Africa College of Nursing (ECSACON)で発表し、開発した教育介入について関心が集まった。特に教育教材として使用した、出産準備についての物語のブックレットについて、アフリカ諸国、欧米からの参加者から関心を寄せられた。また、プログラム評価部分は、アジアの若手研究者の集う East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS)にてポスター発表した。教育プログラムの参加者から高い評価を得ていることで、そのプログラムの内容に関心が集まった。国際学術誌に投稿した論文はレビューアーの選定に時間がかかり、現在も査読中である。

R-2 では、施設分娩中の軽蔑と虐待に関する実態調査を実施し、分析によって助産師の労働環境やシステムと関連した虐待の実施が明らかになった。タンザニアで助産師が自身の

ケアを患者虐待と関連させて回答した研究は先進的であり、ケアの改善への示唆に富んだ結果が得られた。本事業 R-2 の先行研究であるタンザニアでの Humanized Childbirth セミナーの介入研究は、論文の出版に至った。また、助産師の軽蔑と虐待に関する質的調査に関する研究は現在国際学術誌にて査読中である。軽蔑と虐待の研究を基盤にしたケアリングの視点から The 3rd International Society of caring and Peace Conference (Kurume, Japan) “Caring and Practice”のシンポジストとして招聘講演を行った。

Global Network of WHO Collaborating Centre for Nursing and Midwifery では、国際助産師連盟会長や WHO の助産政策決定に関わる研究者たちとのシンポジウムにおいて、キーノートの一人として本事業のタンザニアとの協働について、招待講演を行った。

S-1 として実施した WHO と三カ国共同セミナーは、エビデンスに則った新生児ケアを学び合い、成果を学会発表した。論文は学会誌への投稿準備中である。

【学術論文】

Horiuchi, S., Shimpuku, Y., Iida, M., Nagamatsu, Y., Eto, H., Leshabari, S. (2016). Humanized childbirth awareness-raising program among Tanzanian midwives and nurses: A mixed-methods study. *International Journal of Africa Nursing Sciences*, 5, 9-16.

【招待講演】

Horiuchi, S. “Let’s Minimalize the Power Difference in Patients-Clinician Relationships, Symposium Caring and Practice, The 3rd International Society of Caring and Peace Conference (Kurume, Japan), March 25-26, 2017.

Shimpuku, Y. “Why midwives make a difference to women and newborn health” as a keynote speaker, 11th Biennial Conference of the Global Network of WHO Collaborating Centre for Nursing and Midwifery, Glasgow (Scotland), July 27-29, 2016.

【学会発表】

Oka, M., Horiuchi, S., Shimpuku, Y., Madeni, F. and Leshabar, S. “Evaluation of an Educational Program for Nurses About Birth Preparedness and Complication Readiness in Rural Tanzania” the 12th scientific conference of the East, Central and Southern Africa College of Nursing (ECSACON) (Kenya) September 7-9, 2016.

Oka, M., Shimpuku, Y., Nagamatsu, Y., and Horiuchi, S. “Improve Early Essential Newborn Care: the fostering of facilitators from Tanzania and Indonesia” the 11th St. Luke’s Academia January 28, 2017.

Oka, M., Horiuchi, S., Shimpuku, Y., and Shishido, E. and Madeni, F. “Evaluation of Nurses’ Perceptions of the Educational Program on Antenatal Counseling Program in Rural Tanzania” the 20th conference of the east Asian forum of Nursing Scholars (EAFONS) (Hong Kong), March 9-10, 2017.

<若手研究者育成>

研究者交流では、日本側拠点研究者のタンザニア渡航時に大学院生 13 名が同行した。現地での研究教育活動に参画し、タンザニア側研究者へプレゼンテーションを行った。タンザニア側若手研究者も大学院生グループで計画していた若年妊娠予防プロジェクト案をプレゼンテーションし、お互いから学びあう機会となった。

R-1, R-2 にも計画通り大学院生が 1 名ずつ参画し、R-1 から 27 年度修士論文を提出した大学院生は博士課程に進学し、R-2 から 28 年度は別の大学院生が博士論文を執筆するに至った。タンザニア側拠点機関より博士課程後期に留学している若手研究者が 1 名おり、本事業の目的に即した若年妊娠予防ケアのプログラムを開発し、研究計画書を書き上げ、口頭試験に合格した。

タンザニア側拠点期間に本学と共同で設立した助産学修士課程からは、1 期生 9 名が修了した。それぞれにタンザニアの助産ケアを改善するような研究課題に取り組んだ。タンザニアにおける助産リーダー育成は進行していると言える。

インドネシア側は、日本側、インドネシア側両国の若手研究者が R-3, S-3 に参画した。事業全体を通し、若手研究者の積極的な育成と活用が実行できている。

【聖路加国際大学紀要】

Shimpuku, Y., Horiuchi, S., Nagamatsu, Y. (2017). Reciprocal learning effects between the JICA Collaborative Course and the International Cooperation Seminar in Tanzania. *St. Luke's International University Bulletin*, 3, 58-62.

【博士論文】

下田 佳奈 Prevalence of and Factors Relating to Nurses’ and Midwives’ Self-Reported Disrespect and Abuse of Women during Facility-Based Childbirth in Tanzania (タンザニア施設内分娩における看護・助産師から女性への軽蔑と虐待の実態およびその要因の探索)

【学会発表】

Shimpuku, Y., Horiuchi, S. “Report of long-/short-term dispatch education program in Tanzania to develop global maternal child health human resource.” 57th Annual Meeting of Japan Society of Maternal Health (Tokyo), October 14-15, 2016.

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

本事業による社会貢献、また独自の目的として、臨床への還元を掲げている。タンザニアでは、R-2により、人を尊重し、女性と家族の意思決定を促進する人間的な出産を提供できるように、分娩時の軽蔑と虐待について、助産師自身が行っている軽蔑と虐待を回答した。結果から、ケアの放棄など出産アウトカムに重大な影響をもたらす行為があることが判明した。背景要因として助産師の労働環境の見直し、現任教育の充実、助産師としての自律性や誇りの育成、職場の人間関係の調整等が必要であるという示唆が得られた。この結果は論文で発表するとともに、保健省への政策提言につなげていく。

インドネシアで実施した R-3 では、助産師たちが早期カンガルーケアについて学びたいというニーズから、早期母子接触に関するセミナーを S-3 として実施した。実践練習を交えたセミナーは助産師たちの知識とスキルの向上に効果的であると評価を得た。

世界保健機関(WHO)との共同で Early Essential Newborn Care (早期必須新生児ケア)のセミナーを S-1 として開催するに際し、日本語訳した動画はインターネット上で公開され、医療者から一般の母親まで幅広い対象が視聴している。開催した S-1 は、WHO 西太平洋事務局より、好事例として HP 上で公開された。本事業に関与するすべての活動は、タイムリーにニュースレターとして世界に配信され多くの人々が手にすることができるように周知を行っている。

総じて、タンザニアとインドネシアの助産ケア改善に向けた実践的な研究教育拠点としての機能が、臨床ケアの改善という社会貢献に直接的に繋がっていると言える。

<オンライン公開成果物>

世界保健機関 日本語版 First Embrace

<https://www.youtube.com/watch?v=CJHmbzn6a9Q>

Second Regional Forum of WHO Collaborating Centres in the Western Pacific, 28-29 November 2016. Midwives learning from each other across countries and cultures.
http://www.wpro.who.int/whocc_forum/highlights/news/20161116-midwives-learning-across-c/en/

Asia Africa Midwifery Research Center Newsletter 14-17.

<http://university.luke.ac.jp/about/project/aamrc/newsletter.html>

7. 平成29年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

タンザニアでは、これまでに構築した関係性を基盤に、29年度幅広く研究プロジェクトを展開する。R-1は実施した妊娠期ケアの介入研究の結果に基づき、妊婦自身の語りを促す教育介入に展開するための調査を実施する。29年度に新たに実施する R-5 は、R-1 で開発した妊娠期教材をベースに、若年妊娠した少女へのケアに特化した妊娠期ケアを開発し、介入研究を行う。R-2 は分娩期ケアの実態調査を論文に出版する。R-4 では 28 年度実施し

た S-1 の新生児ケアセミナーをタンザニアに展開し、そのプロセスをアクションリサーチとする。R-6 では、新生児死亡リスクの高い低出生体重児に適切な看護ケアが行われたかどうか、母親が受けた母乳育児に関する教育が母親の行動にどのように繋がっているか、母乳育児行動と児の発達と予後についての実態調査を行う。これまでに築かれた研究協力体制が、母子の健康を包括的に改善する研究教育拠点として、合同調査を行う。

インドネシアでは、28 年度に育成したファシリテーターを中心に、S-2 で新生児ケアセミナーを実施する。28 年度実施した R-3 と S-3 の成果は、インドネシア研究者と共に論文にまとめ発表していく。

<学術的観点>

タンザニアでは、28 年度から行っている R-1 の論文投稿を出版につなげ、妊娠期ケアの質を改善する医療者の継続教育について国際的に公表する。R-2 もタンザニアにおける分娩期ケアの改善に向けた助産師自身のケア評価としての研究を国際学術誌に投稿する。R-4、R-5、R-6 で新たに取り組む教育プログラムや実態調査も、論文にまとめる。

インドネシアでは、インドネシアの助産師のニーズに基づいた 28 年度 S-2 の教育介入について、その効果を発表する。28 年度に三ヶ国で実施した新生児ケアのセミナー成果も、論文にまとめ公表する。助産研究拠点期間として、最終年度にこれまでの成果を多く公表する計画である。

<若手研究者育成>

研究者交流は、日本側拠点の大学院生のタンザニア派遣を継続し、現地の大学院生や研究者との交流を通し、国際共同研究の実際を学ぶ機会とする。R-1、R-2 はそれぞれ参画した大学院生が論文を発表する段階にあり、R-4、R-6 も、参加する日本側大学院生がそのデータを用いてそれぞれ修士論文にまとめる機会を提供する。また、それぞれにリサーチアシスタントとしてタンザニア側拠点から若手研究者を参画させる。R-5 は、タンザニア側拠点機関から日本側拠点機関に留学中の博士課程の大学院生が参画し、タンザニア研究者を中心とした国際共同研究を展開する。

インドネシア側では、28 年度のセミナーや研究に参画した大学院生が教育効果を論文化することに加え、インドネシア側若手研究者も、共同研究を論文に発表していく。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

本事業による社会貢献、また独自の目的として、臨床への還元を掲げている。29 年度も、すべての研究事業は現場の助産ケアの改善に還元できる内容となっている。直接的には、S-1 として新生児ケアセミナーをタンザニアに展開し、コーチングの概念に基づいた寄り添いのサポートで、現場の実践能力の向上を行う。インドネシア側も S-2 として新生児ケアセミナーを実施することで、臨床でケアを行う看護師、助産師のケアを改善する。両国とも、WHO のプログラムである Early Essential Newborn Care の教材を使用するため、開発者である WHO 西太平洋事務局の Howard Sobel 氏を協力者に加え、WHO との連携体制

を強める。

WHO との協働の一環として、日本の助産ケアに関する動画を作成し、タンザニアやインドネシアでのセミナーで教材として使用する。助産ケアの改善を通じた社会への貢献に加え、一般社会への発信を強めることで、拠点機関や相手国にとどまらず、一般市民への情報提供を実施する。

8. 平成29年度研究交流計画状況

8-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成 27 年度	研究終了年度	平成 29 年度
研究課題名	<p>(和文) タンザニア農村部の助産師・看護師を対象とした、出産準備カウンセリング教育プログラムによる知識と技術の向上</p> <p>(英文) Improve Health Worker's Knowledge and Skills by Education Program of job aid Supported Counseling for Birth Preparedness and Complication Readiness (BP/CR) in Rural Tanzania</p>				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	<p>(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授</p> <p>(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor</p>				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職	<p>(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Senior Lecturer</p>				
29年度の 研究交流活動 計画	<p>28年度までに実施した看護師・助産師を対象とした妊婦健診での出産準備教育カウンセリングの技術の向上に関する教育プログラムの実施と評価を通し、助産師のカウンセリング技術の知識と技術の向上を認めることができた。この先助産師のカウンセリングの効果を高めるためには、妊婦健診の場で、妊婦が自身の健康状況や出産準備に対する状況を語ることをサポートする必要性が示された。したがって、29年度には、タンザニア農村部の妊婦健診での妊婦の会話の実態調査と、妊婦グループによる会話促進プログラムの開発と評価を実施することとし、新しい調査をR-7として設ける。R-1はこれまでの調査結果を論文として学術誌に発表して終了する。</p>				
29年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	<p>① タンザニア側研究者との共同で、28年度までに実施した調査結果を論文にまとめ発表することで、開発した教材による助産師の妊婦健診中のコミュニケーションの改善の効果を国際母子保健関連研究者に周知することができる。</p>				

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 27 年度	研究終了年度	平成 29 年度
研究課題名	(和文) タンザニアにおける施設分娩時の助産師から女性への軽蔑と虐待の実態調査 (英文) Survey on Disrespect and Abuse during Childbirth in Tanzania				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授 (英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Senior Lecturer				
29年度の 研究交流活動 計画	28年度は、施設分娩における助産師から女性への軽蔑と虐待の実態を探るため、助産師を対象にした質問紙調査を実施した。その結果、先行研究の女性側の報告と同様、一定の割合で女性へ軽蔑的なケアや虐待が実施されているという結果が見受けられ、また助産師の労働環境・システムがそれらの行動に関連していることが明らかとなった。今年度は、メールでのコミュニケーションにより、これらの結果を国際学術誌へ投稿する。また、メールでのやりとりによる論文出版のプロセスを通し、分娩期の実際の行動と労働環境との関連が示唆されていることをタンザニアの協力施設へ報告およびフィードバックする。				
29年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	① タンザニア助産師自身からの報告として、その実態調査を公表することは、タンザニア政府への保健分野における政策提言への示唆となることが期待される。また他の類似した状況の国におけるケアの質改善への情報提供となることも期待される。 ② タンザニア助産師へ結果をフィードバックすることで、助産師が自らのケアを振り返る機会となり、また今後のケアの質について検討する機会の提供ができる。 ③ 調査に携わるタンザニア側、日本側両国の若手研究者の研究参加機会となる。				

整理番号	R-3	研究開始年度	平成 27 年度	研究終了年度	平成 29 年度
研究課題名	(和文) インドネシアの現任教育における助産師の学習ニーズ調査 (英文) Learning needs survey on midwifery in-service training in Indonesia				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授 (英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・ 職	(英文) Yenita AGUS, Universitas Islam Negeri (UIN) Syarif Hidayatullah, School of Nursing, Lecturer				
29年度の 研究交流活動 計画	28年度の調査で、学習ニーズとして、出産直後の早期 Skin-to-skin care に関する学習ニーズが挙げられた。そのため28年度 S-2 として、その教育セミナーを実施した。その実施の様子と教育介入前後での評価研究も実施し、モデルを用いたシミュレーション教育の好効果が得られた。29年度では、4月に他のファンドで2週間来日するコーディネーターと直接の打ち合わせを持ち、その後はメールベースのコミュニケーションにより、それらの結果を学術雑誌に投稿、出版へつなげる。				
29年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	① 臨床の助産師たちが認識している学習ニーズ調査の論文の公表ができ、インドネシア側拠点としての学術業績となる。 ② インドネシア助産師へ結果をフィードバックすることで、助産師が他の助産師も含めた学習ニーズを知り、またそれに対する効果的な教育方法を知る機会となり、また今後のケアの質について検討する機会の提供ができる。 ③ 日本側研究者、インドネシア双方にとって、共同研究に携わることにより、論文執筆における共同過程を学ぶことができる。				

整理番号	R-4	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 29 年度
研究課題名	<p>(和文) EENC の実践普及を目指して行う、CBPR による、助産師の行動変容に関する調査</p> <p>(英文) Behavior change of midwives for implementation and dissemination of Early Essential Newborn Care: Community-Based Participatory Research in Tanzania</p>				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	<p>(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授</p> <p>(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor</p>				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	<p>(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Senior Lecturer</p>				
29年度の 研究交流活動 計画	<p>相手国研究者2名との協働で、S-1で予定している「タンザニアにおける早期必須新生児ケアセミナー(EENC)」を題材に、アクションリサーチを実施する。Behavior Change Wheelモデルを参考にした行動変容を促すための取り組みを計画し、現地助産師と協働するCBPRアプローチをもとに、タンザニア都市部の一産科病棟というコミュニティに見合う、実践が変わる支援について、参加観察・質問紙・インタビューを用いたデータ収集、分析を行う。相手国研究者1名がデータ収集時に協力する。第一にセミナー前後の実践を参加観察にて評価する。また、モチベーションや行動変容の因子について、質問紙とインタビューを用いて評価し、実践が変わる過程において、行動変容を支援するために必要な具体的な取り組みを示唆する。日本側研究者の派遣は2名予定し、1名は3週間、1名は3か月滞在予定である。滞在の間に、2名の相手国研究者とデータの整理、分析を行い、帰国後はメールベースでのやり取りで論文執筆を進める。</p>				
29年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	<p>① タンザニア助産師の、セミナー後の新生児ケアの行動の違いが示される。</p> <p>② タンザニア助産師の行動変容を促す具体的支援、および障壁となる要因が示唆される。</p> <p>③ CBPRの方法を用い、タンザニア人助産師を研究プロセスに参加させることで、助産師が自らの実践をセルフモニタリングする機会となり、持続可能な実践につなげることができる。</p>				

整理番号	R-5	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 29 年度
研究課題名	<p>(和文) タンザニア思春期妊婦に対する、ピア・エドゥケーターによる出産準備教育プログラムの評価</p> <p>(英文) Evaluation of an Education Program on Obstetric Danger Signs Using Peer Educators and Coping Mechanisms among Pregnant Adolescents in Tanzania: Quasi-Experimental Study</p>				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	<p>(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授</p> <p>(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor</p>				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	<p>(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Senior Lecturer</p>				
29年度の 研究交流活動 計画	<p>これまでに本事業では成人妊婦へのケア改善に関する研究を実施してきたが、タンザニアでは若年妊娠が深刻な問題として存在している。先行研究にて、思春期妊婦は同じ状況にある妊婦(ピア)からのサポートを必要としていることが示されている。また妊娠期に、妊娠期、分娩期、産褥期の危険なサインの情報を提供し、一般的に知識レベルの低い思春期妊婦が危険なサインへの気づきえられるよう教育介入が必要である。これらの背景から、タンザニアで、思春期妊婦を対象にピアサポートグループを用いた、出産準備教育プログラムを実施し、そのプログラム評価を行う。3名の日本側研究者が参加し、うち1名は相手国側研究拠点からの留学生であるが、その1名を2か月派遣し、現地アシスタントとプログラムを実行予定である。相手国研究者は1名参加し、研究のスーパーバイズを行う。</p>				
29年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	<p>① 当プログラムの実施により、思春期妊婦が自身の健康を守るための正しい情報を得ることができる。</p> <p>② ピア・エドゥケーターによるサポートを実施することで、若年妊娠をした妊婦が、妊娠期の状況や経験を共有し、妊娠期や分娩期の問題対処能力を高めることができる。</p> <p>③ タンザニア側拠点の教員が日本側拠点の留学生として実施する共同研究であり、タンザニアの若手研究者が日本側のスーパーバイザーの下で研究プロセスを学ぶことができる。</p>				

整理番号	R-6	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 29 年度
------	-----	--------	----------	--------	----------

研究課題名	(和文) 母乳育児と子どもの成長;タンザニア都市部での新生児病棟とカンガルー病棟の母乳育児指導の比較
	(英文) Mother's breastfeeding practice and baby's growth; Comparing breastfeeding education in Neonatal and Kangaroo units in Urban Tanzania
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授
	(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) Bruno SUNGUYA, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Public Health, Acting Department Head
29年度の 研究交流活動 計画	<p>本研究には、タンザニア協力機関(ムヒンビリ国立病院)に赴任している日本側研究者が携わる。28年度までに赴任先で行ったベース調査によって、低出生体重児が多く入院しているムヒンビリ国立病院の新生児病棟において、母乳ケアの指導がされることが少なく、同室の母親同士が教え合いをしていたり、退院時指導も約半数の母親が受けないまま退院している。もしくは、退院指導を受けていたとしても、その指導方法は看護師間で統一されておらず、退院後の外来受診にて、「母乳が出ない」という相談が多いことに繋がっていると考えられた。WHOが推奨している生後6ヵ月までの完全母乳育児の継続は困難な状態であり、結果、児が母乳に含まれる十分な栄養と免疫成分が得られないことで、下痢、肺炎、発達遅延などのリスクに曝され、最悪死に至る危険がある。そのため、低出生体重児の母親が入院時/退院時に看護師から母乳ケアに関してどのような指導を受けているのか、その影響は子どもの成長に関連があるのか、また自宅に帰ってから母乳ケアを困難にしている要因はあるのかの記述的調査を実施する。相手国に赴任している日本側研究者と相手国側研究者1名、日本側研究者1名の3名で研究計画書と研究倫理審査の打ち合わせを行い、研究倫理審査受理後、相手国赴任中の日本人研究者が主体となり新生児病棟とカンガルーケア病棟で、作成した質問紙、インタビューガイドを用いたデータ収集を相手国研究者から紹介を受けたアシスタントと共に行う。日本側研究者2名で初期分析を行い、相手国研究者にその妥当性を確認する形で分析を進める。</p>

29年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	<p>① 新生児病棟とカンガルーケア病棟で行われる母乳育児指導方法によつて、母親の母乳育児に対する知識・態度・行動がどのように影響されるかが記述される。</p> <p>② 母親の母乳育児に対する知識・態度・行動が子どもの成長・健康状態にどのように影響するかが記述される。</p> <p>③ 看護師が病棟で指導すべき最も適切な指導方法が示唆される。</p>
---	---

整理番号	R-7	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 29 年度
研究課題名	<p>(和文) タンザニア農村部の妊婦健診における、看護師とのコミュニケーション向上を目的とした妊婦グループプログラムの開発と評価</p> <p>(英文) Feasibility Study of Group Meeting for Empowering Women to Communicate at Antenatal Care in rural Tanzania</p>				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	<p>(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授</p> <p>(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science, Professor</p>				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	<p>(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences, School of Nursing, Senior Lecturer</p>				
29年度の 研究交流活動 計画	<p>R-1 で 28 年度までに実施した看護師・助産師を対象とした妊婦健診での出産準備教育カウンセリングの技術の向上に関する教育プログラムの実施と評価を通し、助産師のカウンセリング技術の知識と技術の向上を認めることができた。この先助産師のカウンセリングの効果を高めるためには、妊婦健診の場で、妊婦が自身の健康状況や出産準備に対する状況を語ることをサポートする必要性が示された。したがって、29 年度には、タンザニア農村部の妊婦健診での妊婦の会話の実態調査と、妊婦グループによる会話促進プログラムの開発と評価を実施する。よって、R-7 として新たに「タンザニア農村部の妊婦健診における、看護師とのコミュニケーション向上を目的とした妊婦グループプログラムの開発と評価」を設け、日本側研究者 3 名と相手国研究者 1 名とのメールベースのやり取りで計画書を作成し、研究倫理審査に提出する。その受理後、日本側研究者 1 名と相手国研究者 2 名により実態調査とプログラムの実施を行う。データ収集を 2 名で実施した後、相手国側研究者がスワヒリ語データの英語翻訳とデータ整理を行い、そのデータを日本側研究者 3 名で初期分析を行う。分析の妥当性を相手国側研究者に確認をする形で進める。</p>				

29年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果	<ul style="list-style-type: none">① タンザニア農村部での妊婦健診において、妊婦と看護師のコミュニケーションの実態が示される。② 実施にあたる日本側、タンザニア側研究者がプログラム開発と評価にインプットを出し合い、お互いの強みを活かした新しいプログラムができる。③ 妊婦健診において、看護師とのコミュニケーション向上を目的とした妊婦グループプログラムの実行可能性が評価される。
---	---

8-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「タンザニアにおける早期必須新生児ケアセミナー」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Early Essential Newborn Care Seminar in Tanzania“
開催期間	平成 29 年 7 月 10 日 ~ 平成 29 年 7 月 12 日 (3 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) タンザニア、ダルエスサラーム、ムヒンビリ国立病院
	(英文) Tanzania, Dar es Salaam, Muhimbili National Hospital
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授
	(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke’s International University, Graduate School of Nursing Science, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Sebalda LESHABARI, Muhimbili University of Health and Allied Sciences School of Nursing, Senior Lecturer

参加者数

派遣先口 派遣元口	セミナー開催国 (タンザニア)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	A.	3/ 21
	B.	5
タンザニア 〈人/人日〉	A.	5/ 15
	B.	15
フィリピン 〈人/人日〉	A.	1/ 7
	B.	0
合計 〈人/人日〉	A.	9/ 43
	B.	20

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
 B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>28年度に実施した日本学術振興会研究拠点形成事業「世界保健機関/三国共同セミナー早期必須新生児ケア(Early Essential Newborn Care (EENC))において、タンザニア側のEENCファシリテーターが育成された。29年度はそのファシリテーターを中心に、タンザニアで実践に携わる助産師に教育セミナーを実施し、新生児ケアを改善する。その改善プロセスはR-4と連動させ、研究としても成果を示す。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>① エビデンスに基づいた新生児ケアを、タンザニアで実践に携わる助産師にコーチングの手法を用いて伝えることができる。 ② タンザニア側研究者がファシリテーターとして現場の助産師を教える機会を持つ。 ③ 日本側若手研究者が、WHOとの共同セミナーをタンザニアへ展開する機会を持ち、タンザニアの新生児ケアを改善するために必要な援助機関との協働について学ぶことができる。 ④ WHO タンザニアカントリーオフィスとも今後の共同を話し合うことができる。</p>	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>聖路加国際大学参加研究員、事務局 世界保健機関、西太平洋事務局 ムヒンビリ健康科学大学事務局</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 外国旅費、備品・消耗品購入費、その他経費</p>
	<p>タンザニア側</p>	<p>内容 タンザニア国内旅費</p>
	<p>フィリピン側</p>	<p>内容 フィリピン国内旅費</p>

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「インドネシアにおける早期必須新生児ケアセミナー」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Early Essential Newborn Care Seminar in Indonesia“
開催期間	平成 29 年 10 月 23 日 ～ 平成 29 年 10 月 25 日 (3 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) インドネシア、ジャカルタ、国立イスラム大学
	(英文) Indonesia, Jakarta, Universitas Islam Negeri (UIN) Syarif Hidayatullah
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授
	(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke’s International University, Graduate School of Nursing Science, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Yenita AGUS, Universitas Islam Negeri (UIN) Syarif Hidayatullah, Lecturer

参加者数

派遣先 派遣元		セミナー開催国 (インドネシア)	
		A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	2 / 10	
	B.		
インドネシア 〈人／人日〉	A.	3 / 15	
	B.	20	
フィリピン 〈人／人日〉	A.	1 / 5	
	B.		
合計 〈人／人日〉	A.	6 / 30	
	B.	20	

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
 B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	28年度に実施した日本学術振興会研究拠点形成事業「世界保健機関/三国共同セミナー早期必須新生児ケア(Early Essential Newborn Care (EENC))では、インドネシア側のEENCファシリテーターも育成された。28年度S-3では、R-3で示されたニーズに基づき、EENCに含まれる早期母子接触のセミナーを実施し、インドネシアで行う教育セミナーの課題も抽出した(例、言語の壁の問題)。29年度はその課題を克服する形で、インドネシアでEENCのプログラムを実践に携わる助産師に実施し、新生児ケアを改善する。	
期待される成果	<ul style="list-style-type: none"> ① エビデンスに基づいた新生児ケアを、インドネシアで実践に携わる助産師にコーチングの手法を用いて伝えることができる。 ② インドネシア側研究者がファシリテーターとして現場の助産師を教える機会を持つ。 ③ 日本側若手研究者が、WHOとの共同セミナーをインドネシアへ展開する機会を持ち、インドネシアの新生児ケアを改善するために必要な援助機関との協働について学ぶことができる。 ④ WHO インドネシアカントリーオフィスとも今後の共同を話し合うことができる。 	
セミナーの運営組織	聖路加国際大学参加研究員、事務局 世界保健機関、西太平洋事務局 国立イスラム大学事務局	
開催経費 分担内容	日本側	内容 外国旅費、備品・消耗品購入費、謝金、その他経費
	インドネシア側	内容 会場提供
	フィリピン側	内容 フィリピン国内旅費

整理番号	S-3
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「タンザニアでの研修報告 2017」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “Report about experiences in Tanzania 2017“
開催期間	平成 28 年 11 月 16 日 (1 日間)
開催地 (国名、都市名、会場名)	(和文) 日本、東京、聖路加国際大学
	(英文) Japan, Tokyo, St. Luke’s International University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 堀内成子・聖路加国際大学・大学院看護学研究科・教授
	(英文) Shigeko HORIUCHI, St. Luke’s International University, Graduate School of Nursing Science, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文)

参加者数

派遣先□ 派遣元□	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	12/ 12
	B.	20
〈人／人日〉	A.	
	B.	
〈人／人日〉	A.	
	B.	
合計 〈人／人日〉	A.	12/ 12
	B.	20

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
 B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

セミナー開催の目的	平成 29 年 7 月に研究者交流として日本側参加研究者のタンザニア渡航を予定している。また、10 月には、長期派遣されていた大学院生も帰国する。その成果を広く日本の助産学生、助産師、その他国際保健に興味のある一般市民に報告することを目的とする。	
期待される成果	<p>① 日本の助産学生、助産師、その他国際保健に興味のある一般市民が、日本人研究者から見たタンザニアの現状について、また本事業で実施している活動について理解を深める。</p> <p>② 28 年度参加した研究者、また 29 年度新たに参加した研究者を含め、日本の助産学生、助産師、その他国際保健に興味のある一般市民と参加研究者の意見交換の機会となり、より多角的な視点や今後の研究交流事業をより効果的なものとする意見を出し合う。</p> <p>③ セミナーの実施により、大学院生を含めた参加研究者の発表の機会となり、研究者間の相互理解と信頼関係が深まる。</p>	
セミナーの運営組織	聖路加国際大学参加研究員、事務局	
開催経費 分担内容	日本側	内容 その他経費

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

共同研究、セミナー以外の交流（日本国内の交流を含む）計画を記入してください。

所属・職名 派遣者名	派遣時期	訪問先・内容
聖路加国際大学・助教・新福洋子	平成29年7月上旬（10日間）	タンザニア、ムヒンビリ健康科学大学を訪問し、同大学教員、学生との交流、ムヒンビリ国立病院、バガモヨ県立病院の見学から、タンザニアの助産教育、実践に対する理解を深める。
聖路加国際大学・博士課程前期・由利紗織	同上	同上
聖路加国際大学・博士課程前期・中川理恵	同上	同上
聖路加国際大学・博士課程前期・轡田みどり	同上	同上
聖路加国際大学・博士課程前期・野田ひろ子	同上	同上
聖路加国際大学・博士課程前期・渡辺由佳子	同上	同上
聖路加国際大学・博士課程前期・濱津いよ	同上	同上
聖路加国際大学・博士課程前期・渡辺采那	同上	同上
聖路加国際大学・博士課程前期・浅倉美貴	同上	同上
聖路加国際大学・博士課程前期・小島悠美	同上	同上
聖路加国際大学・博士課程前期・荒井麻友子	同上	同上
聖路加国際大学・助教・新福洋子	平成29年8月21日～25日	世界保健機関西太平洋事務局で開催される母子保健会議に参加し、共同開発する動画教材を発表することで、本事業の成果をアジア太平洋地域の母子保健政策作成者、事業実施者に共有する。
聖路加国際大学・助教・新福洋子	平成29年12月末	タンザニア拠点機関との共同研究の進捗確認、会合

8-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

該当なし

9. 平成29年度研究交流計画総人数・人日数

9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣元	日本 〈人／人日〉	タンザニア 〈人／人日〉	インドネシア 〈人／人日〉	フィリピン 〈人／人日〉	合計 〈人／人日〉
日本 〈人／人日〉		7/ 335 (15/ 145)	2/ 10 (0/ 0)	1/ 7 (0/ 0)	10/ 352 (15/ 145)
タンザニア 〈人／人日〉	()		()	()	0/ 0 (0/ 0)
インドネシア 〈人／人日〉	()	()		()	0/ 0 (0/ 0)
フィリピン 〈人／人日〉	()	1/ 7 (0/ 0)	1/ 5 (0/ 0)		2/ 12 (0/ 0)
合計 〈人／人日〉	0/ 0 (0/ 0)	8/ 342 (15/ 145)	3/ 15 (0/ 0)	1/ 7 (0/ 0)	10/ 352 (15/ 145)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

9-2 国内での交流計画

12/12 <人/人日>

10. 平成29年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	0	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	3,400,000	
	謝金	900,000	
	備品・消耗品 購入費	340,000	
	その他の経費	1,840,000	
	不課税取引・ 非課税取引に 係る消費税	320,000	
	計	6,800,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		680,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合 計		7,480,000	